



□□□-□□□

## 今月の内容

巻頭言「20年から20年への展望」	1
特集：青海省地震プロジェクト	2~3
現行のプロジェクト報告	3~4
月イチ★シリーズ「食と国際協力」	5~6
黒田理事を偲ぶ	7
TOPICS ①	9~11
TOPICS ②	12
イベント情報	
会員募集・寄付のお願い	
会員・寄付者紹介	13
役員・スタッフ活動記録	14

  
CODE  
Letter

2014. 12. 5 Vol.51

(特活)CODE 海外災害援助市民センター 発行  
〒 652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10  
TEL: 078-578-7744, FAX: 078-574-0702  
Email: info@code-jp.org  
URL: http://www.code-jp.org/  
郵便振替: 00930-0-330579

## 「20年からの20年への展望」

あれから20年が経った。もう20年か、という感懷に襲われる。20年前の日々、電気が通じたのは早かったが、水、ガスがなく、水を求めて歩き回った。あるときは回ってくる自動車に並び、あるときは道路に埋められた水道管の割れ目から噴き出す水に皆が並んだ。先を争うようなことはなかった。皆見ず知らずながら優しかった。

皆よく歩いた。いわば災害ルックで、背中にリュックを背負い、ズック靴であった。バスには前からも後ろからも乗った。よく譲り合った。

当時人々は、家の中で何が壊れたかについて話した。壊れた物を惜しむというのではなく、大事なものは何か。これからは物にこだわるのではなく、たとえ少しでも、必要な物を大切にしたい、と。物への執着を捨てた。いわば、どっぷり浸かっていた近代の物質文明への決別であった。

真に必要なものは何か。物ではなかった。人々が必要としたのは、衣食住は当然ながら、人であった。人と人のつながりこそが求められた。言うところの、絆（きずな）である。震災は人の生き方を問うた。シンプル・ライフが言われた。

災害は、しかし、世界中で起きる。20万人の人々を飲み込んだインド洋大津波の恐ろしさに震撼させられた。そして、東日本の猛り狂う津波に悪夢を見た。今に続く現実がある。

私たち CODE にとって世界に出かけた最初は阪神淡路大震災後4ヶ月で発生したサハリン地震であった。まだ神戸の街にはがれきがあった。住もなかった。しかし、支援へのお返し、お互い様、が合い言葉であった。文字通り、痛みが分かった。痛みが分かることの大切さ。人の痛みが分かるることは行動の原動力である。その後、世界、特に災害の多いアジアに出かけるたびに教えられることは、物質的には必ずしも豊かではないのに、人々が明るく、優しいことであった。私たちは、20年の中で、置き忘れてきた感がある。忙しさに紛れて、心を亡くしてしまってはいないか。これから20年、物を中心としたハードではなく、人を中心としたソフトこそが大切に思われる。ひとりひとりの人を大切にする共同体を創りあげたい。

CODE 海外災害援助市民センター代表理事  
芹田 健太郎

# 特集

## 青海省地震とヤク銀行

### ◎青海省地震について

2010年4月14日、中国青海省玉樹チベット自治州でM7.1の地震（玉樹地震）が発生しました。中心の街、結古鎮を中心に大きな被害を出し、2700名以上の方が犠牲になりました。被災地のチベット高原は標高4000m前後で、1年のうち8か月が冬に閉ざされる事と、省都である西寧から約800kmの悪路を16時間かけて被災地に向かう状況で救援活動も非常に難航しました。今年夏に現地を再訪しましたので近況をご報告します。

### ◎これまでのCODEの活動

これまでに四川地震のカウンターパートであるSim'sのマキさんや香港人ボランティアなどと現地に三度赴き、被災者へのヒアリング、中国のNGO「生命閑懐協会」（四川地震のボランティアと共に医療支援を展開）や現地のNGO「江源發展促進会」（環境や貧困対策を行う玉樹最大のチベット人NGO）との協議も行い、支援プロジェクトを模索してきました。最終的にインドネシア人アーティストのニアニさんが環境保全活動を行っている地域で「ヤク銀行プロジェクト」を行う事になりました。



チベット人の信仰する寺院も倒壊した

### ◎「ヤク銀行プロジェクト」



ヤク

#### \*ヤク

チベット高原特有の毛の長い牛「ヤク」は、大きなもので体長約2~3m、体重約1トンになり、本来野生であったものを約3000年前にチベット人によって家畜化されたと言われています。ヤクのミルクは、バター・ヨーグルトになり、自家消費にとどまらず、寺院にも寄進されます。その皮や毛はテントやロープ、衣類になり、角や骨は櫛やアクセサリーなどの装飾品として、糞は燃料に、肉や血は食用として売られます。ほとんど捨てるところがないと言われるほどヤクはチベット人の暮らしには欠かせない家畜なのです。

#### \*ヤク銀行

地震で被災した被災者にヤクを提供し、飼育してもらいます。その被災者はヤクを育てる中でミルクから作られるバター・ヨーグルト、現金などで返済してもらい、その資金で次の被災者を支える仕組みです。現地の僧侶、遊牧民、村のリーダー、獣医、教師などで組織された「ヤク銀行委員会」がこのヤク銀行プロジェクトを担っています。委員会の数度の協議の結果、ヤクは集団で育てた方がいいという事から、まずは最も貧しい遊牧民に対してヤクを提供する事が決りました。



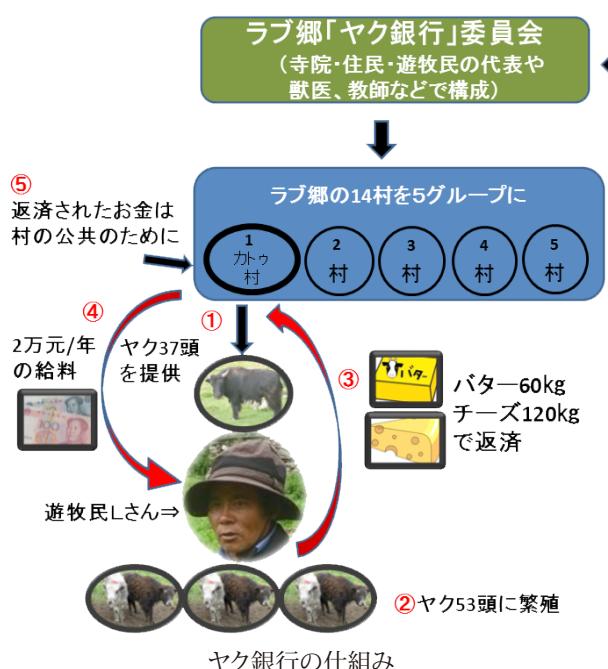
ヤク銀行委員会のメンバー

### \*進捗状況

ヤク銀行委員会は、拉布郷の14村を5グループに分け、第1グループのカトウ村からヤク銀行を開始し、村で最後の遊牧民Lさん(40代男性)家族に37頭のヤクが提供されました。疫病等で7頭が亡くなりましたが、今春新たにヤクの子どもが産まれ、現在53頭なり順調に増えています。Lさんは、ヤクのミルクからバターやヨーグルトを作り、村に買い取ってもらう事で収入を得ています。その売上げが村の公益のために使われるという仕組みで現在、運営しています。



新たに生まれたヤクの子ども



Lさんの遊牧テント

### \*遊牧民 Lさんと遊牧民の現状

カトウ村では2010年の地震で6名の方が亡くなりました。Lさんも越冬用の石組みの家が倒壊し、政府の支援もなく自力で再建したそうです。Lさんは幼少から遊牧生活を送ってきており、病気でヤクを失っても新たに購入するお金もなく、わずかな牛と羊を放牧させる苦しい状況にありました。Lさんは、夏は4000mの草原のテントで、冬は3500mの石組みの家で暮らしながらヤクや羊を放牧させ、ヤクの皮と毛で出来た伝統テントに住み、バターやヨーグルトを作っています。

現在、チベット高原では過酷な遊牧生活を捨て、街に降り、政府の提示するわずかなお金と引き換えに家畜を売り、定住する人が後を絶ちません。街に出ても読み書きのできない遊牧民には思ったように仕事は見つからないのが現状です。カトウ村は数年前までは8戸の家族が遊牧生活を行っていましたが、今ではLさん家族だけになってしまいました。カトウ村の村長は、「このプロジェクトで遊牧でもしっかりと生計を立てる道筋が見えれば、若者はきっと草原に残るだろう」と語っていました。

このヤク銀行プロジェクトは、チベットの遊牧民が約3000年もの間引き継いできた文化を支える一助となります。引き続きご支援、ご協力のほどよろしくお願いいたします。(吉椿雅道)

# 現行のプロジェクト報告

## ~~~~~ アフガニスタン (2003~) ~~~~~~

「白ぶどう専用の乾燥部屋登場？－農家たちのぶどう栽培に注ぐ真剣なまなざし」

今年の10月に新しいぶどうを農家たちは収穫しました。いまだパキスタンとの政治的状況悪化により、十分な販売場所のないカブール北部では、ぶどう農家たちがレーズン加工のために新しく乾燥専用の部屋を作ったとの報告を受けました。それは大きな土壁の建物の一室に設けられた、奥行きが8mほどの部屋です。壁には、空気の通りがよくなるように、人の顔ほどの四角い穴が足下から天井までたくさん空いています。ここでは白いぶどうを乾燥させます。「なぜ白いぶどうだけなのですか？」と聞くと、白いぶどうは温度変化に弱く、直射日光で乾燥させると、色だけでなく味も変わってしまうのだそう。「白いぶどうはとても繊細なので、日影の皿の上でいつも乾燥させていたが、衛生環境のいい部屋を作りたかったんだ」と話しています。

部屋の天井からは、100本ほどの白い糸が間隔を空けて垂れ下がっていますが、ここにぶどうの房を一つづつ絡ませ、ぶどうを吊った状態で乾かすのだそうです。この方法では、乾燥にかかる時間がより短く、また虫や菌などが付きにくいのです。このように、最近ではアフガニスタンの農家たちが、自分たちで考え決断をし、さらに行動を起こしている様子が伝わってきます。「平和」に向けて歩き出した彼らを後押しするのではなく、共に考えて歩んでいくパートナーとして今後もプロジェクト遂行に力を注ぎたいと思います。（多田茉莉絵）



## ~~~~~ 四川大地震 (2008.5.12~) ~~~~~~

「確実に変わりつつある光明村」

2008年の四川地震から6年が過ぎました。

CODEの支援している北川県光明村の近況ですが、今年8月に現地を訪問した際には、村に光ファイバーが開通していました。村の診療所のパソコンを使って、僕ら日本人と交流するためにチャットを一生懸命に若い子に習おうとする住民の姿がありました。慣れない手つきで活字を入力する様子に震災後の光明村が確実に変わりつつある事を感じました。

この村のXさん（40代女性）は、村で最も早く家の再建を始めたのですが、資金不足の為にずっと家の二階は柱のみで手つかずでした。Xさんは、体を壊しながらも大きな町への出稼ぎを繰り返し、一人で家計を支えていました。その家が今年やっと完成したのです。2階を案内してくれたXさんに、「とうとう完成したんだね。」というと本当に嬉しそうにうなずいていました。

Xさんのこの6年を知っているだけに僕は感極まって「本当に頑張ったね。」としか言えませんでした。そしてXさんは、「これからは出稼ぎに行かずに、家で子どもたちと一緒にミシン仕事をするの。」と嬉しそうに語っていました。6年を経た被災地でもXさんのような人がいます。大きな復興の流れの中で取りこぼされていく「最後のひとり」を忘れずに見守っていきたいと思います。（吉椿雅道）



村の診療所でパソコンを覚える住民たち

## ~~~~~ ハイチ地震 (2010.1.12~) ~~~~~

シスター須藤の講演会と対談「ハイチからの祈り」が開催されました。

CODE のハイチ大地震救援の「レオガン農業技術学校」建設プロジェクトと共にやっているシスター須藤昭子さん（87歳）を神戸にお招きし、講演と芹田健太郎（CODE 代表理事）との対談を9月23日（火・祝）、あすてつぷ KOBE（神戸市中央区）で開催いたしました。祝日にもかかわらず70名の方にご参加いただきました。

講演会では、シスターが1976年に結核治療のためにハイチに初めて行った時の水もなく、多くの人が栄養不足の状態であった過酷な状況や独裁政権後のクーデターの連続で、国連の制裁で石油がストップした事がハイチの人たちを窮地に追いやった事などをお話されました。また、そんな状況下でもハイチの人たちの美しい心を感じたエピソードも語られました。妹の事を想ってパンを食べようとしない少女や亡くなった子供のお母さんが大きなヤシの実を抱えてお礼に来たお話など、貧しい中でも美しいハイチの人たちの心が伝わってきました。

その後、芹田代表からハイチが現在の貧困状態に陥った歴史的経緯などの説明もなされ、対談では、シスターがはげ山に植林を行うためにタイで学んだ炭焼きや木を伐らない為に竹やヤシ殻、モミ殻などを使った炭焼き、その過程で出来る木酢液が殺菌力もあり、作物の成育促進になることなどを一つひとつ学ばれた話も紹介されました。また、結核治療のためにハイチに来たシスターが植林活動をするに至った経緯について、「満足に食べられない病気も治らないし、体力がないと予防にもならない」という事から始まったそうです。ハリケーンの通り道でもあるハイチは毎年、洪水による土砂で農地が奪われ、海岸でも土砂流出のために魚が獲れなくなり、沢山の人たちが生活が出来なくなる、そこで「木を植えることから始めるといけない」とシスターは思い、地元の若者たちと立ち上げたのが、GEDDHというNGOです。このNGOとシスター須藤の長年の夢が、現在CODEと建設している「レオガン農業技術学校」(ETAL)です。この学校でハイチの未来を担う若者が育ってくれる事を願うばかりです。

シスター須藤は最後に「希望が子どもを育てる」と語られました。この学校建設は、まさに希望の一歩なのです。この講演会の参加費の一部や会場でのご寄付をETALの運営資金に使わさせていただきます。ありがとうございました。今後ともご協力のほどよろしくお願ひいたします。（吉椿雅道）



ハイチについて語るシスター須藤昭子さん

## ~~~~~ フィリピン台風 (2013.11.8~) ~~~~~

2013年11月8日、フィリピン中部ビサヤ地方を巨大な台風 Haiyan(フィリピン名:Yolanda)が襲いました。死者・不明者7300人以上の被害を出した台風から1年が経過し、11月8日にはフィリピン各地で追悼イベントが行われました。

高潮で大きな被害を受けたレイテやサマールの町も徐々に活気を取り戻しているようです。しかし、高潮や強風で家屋や仕事、そして家族を失った被災者の苦しみはまだ癒えてはいません。住民の生計は厳しく、被災地では漁の再開をしたくてもできない漁民が多く、また漁を再開できたとしても被災前より少ない収入しか得ることができません。

セブ島北部及びバンタヤン島の被災した住民に漁業ボートと漁網を提供する「フィリピン漁業支援プロジェクト」は、現在、現地NGOネットワークABAGが住民とのボート管理についての話し合いやボートの建設をしており、間もなく被災住民にボートを届けることができます。そしてABAGによって住民教育を行うことによって、新たな生計手段などを住民が学び、女性も仕事を得ることで生活をより向上させていきます。台風の影響により苦しい生活を送る被災者は未だ少なくありません。「1年が過ぎ、復興をする前に被災地が忘れられるのでは。」と心配する被災者もいます。引き続きご支援よろしくお願いいたします。（上野智彦）

## 月イチ★シリーズ 食と国際協力 第5～8回の様子をお届けします

他の国の食を通して、あまりつながりがないと思っていた国々が自分と近く感じる、そのような場をつくることができればと思い始めたこのシリーズでは、月に一度テーマ国の食べ物を食べながら、その国で行ったCODEのプロジェクトを紹介すると共に、皆で語りあう会を設けています。3月から始まったこの会は、6月で四回目を迎え、普段出会うことのないさまざまな方に来ていただけの場になっております。

### 第5回：アメリカ「知らない国のひととお友達になろう —ワールドユースジャパンとコラボ企画 アメリカ在住の現役高校生と学ぶ」

CODEとその姉妹団体である被災地NGO協働センターは、ワールドユースジャパンの青年プログラムに参加し来日していたアメリカ・メキシコ・スペイン出身の高校生たちと一緒に、おにぎりなどの日本食とメキシコ料理のタコスを食べながら会は進みました。2005年8月25日アメリカ南部フロリダ半島にハリケーン・カトリーナ、2002年・2013年とメキシコを襲ったハリケーン被害に対する、CODEの支援を紹介すると共に日本とアメリカの災害発生直後の官・民・NGO団体などの対応の違いを学び、さらにお互いの国で参考にできる点などを考えました。災害時の食べ物としては、ファーストフードではなく、家に蓄えられるものが適しているという話になり、ペルトリコでは梅干しのようなプラム系のものを作る習慣があり、それは災害時などにいいという学びあいが展開されました。

食：タコス、おにぎり



### 第6回：中国青海省「チベット高原から一標高4000mの暮らしから見えるもの」

2010年4月14日に発生したM7.1の地震から、4年が経ちましたが、CODEの吉椿事務局長が8月に青海省を訪問した記録をもとに会が進められました。CODEはインドネシア人アーティストArahmaiani Feisal(イアニ)さんと共に、玉樹州称多県拉布郷(通称ラブ村)で、チベット人にとって大切な家畜であるヤクを提供する「ヤク銀行プロジェクト」を行っています。今回の訪問では、ヤクが提供時の37頭から53頭に増えたとのうれしいニュースを聞き、再貧困層と言われる遊牧民たちだけではなく、事務局全体も彼らの大きな一步に喜びを感じました。ヤクのミルクからはバターやヨーグルトを作ることができ、これらで生計をたてられるという自信が、より一層彼らが前に進む原動力になればと願っています。



食：ヤクジャーキー、ヤクのミルクで作ったヨーグルト

## 第7回：ハイチ「ハイチからの便り—シスター須藤が語る、医・食・農」

CODEが9月23日に行った講演会「ハイチからの祈り～シスター須藤昭子さん講演と対談～」の次の日にも関わらず、シスター須藤をCODE事務所にお招きし、ハイチの暮らしなどについてお話を聞きました。「ハイチの人たちは農業を学ぶべき」をいうシスター須藤の力強い言葉にハイチの人たちを思う気持ちがこめられていました。植民地化、災害、貧困、独裁政権、農業崩壊など悪循環を繰り返してきたハイチの人の自立した幸せを願い、農業の中でも炭・木酢作りを自ら試されてきたことが印象的でした。それらに必要な機材もご自身で調達されてきたとのこと。シスター須藤のこの熱く、そして温かいお気持ちは、シスターがハイチを離れた後の今も、ハイチの人たちの中にあるのだなど、ハイチ農業技術学校建設プロジェクトを進める上でひしひしと感じています。農業技術学校建設後の、先生や生徒たち、また住民たちの発展を見守り続けたいと思います。

食：バナナフライ



## 第8回：アフガニスタン「れーずんの会—初年度を終えて フェアトレードへの挑戦」

この「月イチ★シリーズ 食と国際協力シリーズ」が始まったきっかけはこの「れーずんの会」でした。みなさまから賜りました温かいご支援のおかげで、CODEのアフガニスタンぶどう畑再生プロジェクトの中の、「れーずん事業」は一年を終え、二年目を迎えることができました。この一年でれーずんを実際に食べていただいた方より、「ただただおいしい」「実がつまついていてグミみたい」とのうれしい声を聞くことで、味そのもので勝負に出られるうれしさを日々感じております。また今回は、私たちの事務所近くにある天然パン工房のOさんにアフガニスタン産れーずんで作った酵母による、天然酵母パンを焼いていただきました。Oさんからは「今まで酵母でパンを作って



きたけれど、アフガニスタン産のこのれーずんは香りがとてもさわやかで、味もとてもさわやかに仕上がる」と言っていただき、一同感無量でした。その後プロジェクトを行うアフガニスタンのミール・バチャ・コット地域のカウンターパートである、ラフマンさんにその報告をすると、「モノで認めてもらえるこのうれしさをバネに、さらなるぶどうの有機栽培に力を入れたい」と語っていました。

食：れーずん（黒と白）、  
Oさん手作りのれーずん使用天然酵母パン

# — 黒田裕子理事を偲ぶ —

CODE の理事として設立以来尽力してきた黒田裕子さん(阪神・淡路大震災高齢者障害者支援ネットワーク理事長)が9月24日午前0時27分故郷の島根の病院でご逝去されました。73歳でした。

## 「黒田裕子さんを偲ぶ」

黒田さん、あなたが最後の日々を島根県の実家のそばで過ごしたいので、近々西宮の鳴尾の病院を発ちます、とのことで、あなたを見舞ったのは9月14日のことでした。それから10日ではあなたは逝ってしまいました。10月になれば島根まで出かけましょう、というその折の僕の約束は永遠に果たせないことになってしまいました。もっとも、あなたもいつの頃だったでしょうか、先生の最期は私が看取りますよ、言ってくれていましたね。9月に見舞った折り、あなたは、死は怖くないけれど、時間が欲しい、としきりに言っていました。

あなたは阪神淡路大震災が襲った時、宝塚市の市民病院の副総看護師長でした。その職をなげうって仮設住宅に飛び込みました。あなたが拠点にしたのは被災地最大の仮設団地である西神第7仮設住宅でした。同じように、東北へは震災翌日には入り、僕を案内してくれた気仙沼市の仮設住宅に泊まり込んでいましたね。看護師が24時間見守る体制、昼間は現地の正規看護師、夜間をあなた方が見守る体制だったでしょうか。あなたは災害看護のあり方を巡って全国を飛び歩いて説き続けていましたね。

思い出は尽きませんが、あなたが三重県に講義のため近鉄で通っておられる頃、あまりにも疲れている様子だったので、少しは休んだら、と話すと、あなたは、途中で倒れても本望です、と言つたので、そんなことを言ってはいけません、と諫めたこともあります。そう言えば、四川にかけ、成都と光明村との自動車での往復の間、あなたは頭をもたせかけて寝ていましたっけ。疲れていたのですね。それでも、宿に戻ると、連絡等で遅くまで仕事をしていましたね。本当は、後は任せて下さい、ゆっくりお休み下さい、と言うべきなのでしょうが、法律を専門とする僕には、なかなか言えない言葉です。しかし、あなたの志はしっかりと受けとめていきます。そして、あなたの時間を私たちが引き継ぎます。心安らかにお休み下さい。

2014年11月17日 CODE 代表理事 芹田健太郎



黒田理事と被災地の子ども（四川省光明村）

## 「黒田裕子を偲ぶ会」開催のお知らせ

12月21日(日)に「黒田裕子を偲ぶ会」を開催します。当日は黒田裕子さんにご縁のあった人々とともに故人を偲びたいと思います。

【日時】12月21日(日) 13:30~16:30

【場所】コープこうべ 生活文化センター(神戸市東灘区)

※当日は平服でご参席くださいますようにご案内申し上げます。

【連絡先】NPO 法人阪神高齢者・障害者支援ネットワーク

〒 651-2109 神戸市西区前開南町 1-2-1

TEL: 078-976-5050 Fax: 078-977-0224 E-mail: hks-sien-net@h8.dion.ne.jp

【主催】「黒田裕子を偲ぶ会」実行委員会

# TOPICS ① －こんなこともやっています－

## CODE 寺子屋「震災から 20 年、 国内外の災害復興から学ぶ」

CODE 寺子屋「震災から 20 年、国内外の災害復興から学ぶ」を全 4 回にわたって開催しました。講師には CODE 副代表理事である室崎益輝氏をお招きし、阪神・淡路大震災、国内の災害、海外の災害、そして東日本大震災からの学びを語っていただきました。

### 第1回 「阪神・淡路大震災からの学び」(7月25日) 参加者 20 名

震災から 20 年が経過した神戸の街を引き合いにして、阪神・淡路大震災からの復興の評価、復興計画、市民の動き、震災復興からの教訓などが語られました。室崎氏は「復興とは「生きる力」を取り戻すことである。」と述べ、災害や復興はどのようなものであるかを語りました。また阪神・淡路大震災では国主体の復興計画に対して住民の声が上がり、まちづくり協議会などの新しいまちづくり、仕組みができたことは大きなプラスであるとしています。一方で、コミュニティなど様々な破壊が起こったことなどをマイナス面として指摘しています。

### 第2回「国内の災害復興からの学び」(8月22日) 参加者 20 名

国内の災害復興を題材にして、各災害復興の足跡を学びました。日本の歴史は災害と向き合う歴史であると述べ、北但地震における城崎の温泉復興や函館大火の政府の迅速な対応、戦後の広島の平和復興、酒田大火の迅速な復興、北海道南西沖地震における奥尻の沿岸地域からの移転、中越地震の伝統を取り込んで集落ごとの復興計画を立てる物語復興などを評価しました。

### 第3回「海外の災害復興からの学び」(9月26日) 参加者 20 名

海外の被災地復興の事例から市民活動の変遷、それぞれの災害の特徴、海外の復興から日本の復興に取り入れるべきことなどを学びました。特にメキシコ地震での住民への選べる住宅支援やサンフランシスコ地震におけるサンタクルーズ地区で生まれ、後に中越地震被災地でも採用された物語復興などの先進事例が紹介されました。また、神戸の復興の経験が台湾集々地震の被災地へ、台湾の経験は中越へと受け継がれていることが示され、東北の被災地でも他の復興の経験を取り入れるべきだと述べました。

### 第4回「東日本大震災からの学び」(10月31日) 参加者 38 名

発生から 3 年半が経過した東日本大震災。現在の被災地復興の光と影を見直しました。被災地の中には地域住民が声を上げて地域の文化やコミュニティを尊重した復興が行われている場所があります。一方で、復興の青写真を全て政府や業者が決めてしまい地域に合っていない、住民が合意していない復興を行い、住民がその土地から離れてしまっている場所もあります。室崎副代表は「復興は自立すること、安全になること、変革することを目的にしなければいけません。その復興の過程では合意形成のように元々ある案に住民が賛否を表明する形ではなく、中越やサンタクルーズの物語復興のように住民自らが一から復興の提案して、住民の自立、街の安全、これまでの街の変革をしなければいけない。」と述べています。

今回のシリーズでは延べ 98 の方にお越しいただき大盛況となりました。またこれから NGO、災害救援を担っていく若者にも参加いただきました。室崎副代表のお話はこれからの活動の一助となるかと思います。CODE はこれからも皆さまの学ぶ場を提供していきます。ぜひ CODE のイベントにご参加ください。(上野智彦)

# 阪神・淡路大震災から 20 年～ CODE と若者～

## 「阪神・淡路大震災から 20 年を経て」

来年の 1 月 17 日に阪神・淡路大震災からちょうど 20 年を迎えます。震災直後に生まれた子どもは来年には二十歳を迎え、既に東日本大震災をはじめとする被災地で活躍する者も少なくありません。阪神・淡路大震災から 20 年間、災害現場の最前線を駆け抜けてきた人もいます。先日、ご逝去された黒田理事もその一人です。先達が遺した 20 年間の教訓を若者が受け継いでいくときが訪れています。では、受け継ぐ若者は育ってきているのでしょうか。

来年の 1 月 24 日に震災 20 年を機として「阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015」を開催します。このフォーラムの若者セクションを作っているのは震災当時まだ生まれていなかった高校生や震災当時まだ幼かった 20 ~ 30 代の若者です。フォーラムを作る若者の中には、既に NGO で働くものや災害の現場で活動するボランティアもいます。若者の中でも阪神・淡路大震災から中越、能登、そして東日本へと続いてきた活動の中からも若者の力が芽吹いています。震災をきっかけとして被災地で被災者支援を始めた人、NGO に参加した人、海外へ飛び出した人、身近な人の大切さに気づき教育支援を始めた人、被災地へ飛び込めなかつたことを悔やんで災害啓発を始めた人など、多くの若者が様々な活動に携わっていました。

CODE は今、若者を対象としたイベントを定期的に開催しています。また CODE の活動に若者が関わることで海外に触れる、NGO に携わるチャンスを作っています。これまで CODE が多くの方々から育てられてきたように、今度は CODE がこれまでの 54 回の救援活動で培ってきた経験や「困ったときはお互いさま」、「最後のひとりまで」という想いを、新たに災害救援や NGO の世界に飛び出した若者に伝えています。

次世代の若者が経験を受け継いでいくと言っても様々あります。直接教えを請うだけではなく、その人の活動や人との接し方を見て学ぶこともあります。若者はずっと先を走ってきた方々の生き様から学んでいきます。20 年の時を経て阪神淡路大震災の記憶を持たない若者が、これまで積み重ねてきたものを受け継ぎ、今後の活動で力を発揮して、そしてそれをまた次の世代へ伝えていきます。（上野智彦）



阪神・淡路大震災当時の三宮駅

## 「阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015」開催のお知らせ —

1995 年 12 月、神戸の市民と NGO は 2 万人の被災市民とともに「くらし再建『いま』を見すえて」というテーマを掲げて「市民と NGO の『防災』国際フォーラムを開催し、神戸宣言を発表しました。その宣言で「被災地の私たちは、自ら『語りだす』『学ぶ』『つながる』『つくる』『決める』行動を重ね、新しい社会システムを想像していく力を養っていくことから、私たち自身の復興の道を踏み出していくことを強く呼びかける」と掲げました。そのメッセージをふまながら、阪神・淡路大震災の被災地 KOBE の 20 年を考えます。このフォーラムでは次世代に何を伝えるべきか、次世代が大切にしている想いを紡ぎだしながら考えていきたいと思っています。ぜひ多くの方のご参加をお待ちしています。

【日時】 2015 年 1 月 24 日（土） 10:00~17:00

【場所】 こうべまちづくり会館（兵庫県神戸市中央区 4-2-14）

【参加について】 参加無料

【主催】 阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム実行委員会

# 中国のボランティア代表団が来る！

日本国際協力センター（JICE）の研修事業で「中国ボランティア代表団」の15名がCODEの事務所を訪れました。これまでのCODEの海外での救援活動やその理念、四川大地震での現場の話などをさせていただきました。

参加者の方々は、中国各地で博物館、障がい者、貧困、孤児、教育、高齢者、子育て、震災などの多分野で活動されている方々で、日本の災害救援のNGOに非常に关心が高く、講義後も活発な議論が展開されました。参加者の中からは、「運営資金はどうしているのか?」、「団体としての課題は?」、「四川の被災地で日本のNGOがこんな支援しているとは知らなかった。」、「海外で活動する時に困難な事は?」などの質問や感想も出、涙を見せる方もいました。最後に、一人の女性が「中国のためにこれだけの支援をしてくれて本当にありがとうございます。感動しました。災害の時は国を超えて助け合わないといけないですね。それには民間のつながりがとても大切だと感じました。」と語ってくれた。僕自身が四川での活動の中で感じてきた事を分かち合えた瞬間で僕も胸が熱くなりました。

その後、JICEの方が事務所を訪問してくれ、「代表団から預かりました。」と封筒を手渡されました。それには、「あなたたちの後見に非常に感謝しています。中日友好が世代を超えて続きますように。」と書かれ、中には1万5000円が入っていました。研修後、一人ひとりがお金を持ち寄ってCODEに寄付しようと皆で話あったそうです。

このような一つひとつの出会いが、相互理解を生み、一人ひとりがつながっていくんだと感じました。

（吉椿雅道）

## 北米から学生が研修に来ました

「日本の新しい一面を見た高校生たち」

7月14～18日の5日間、NPO法人ワールドユースジャパンの行う国際青少年プログラムの一環として、私たちCODEと被災地NGO協働センターは、アメリカ、メキシコ、スペインから来た8人の高校生と一緒に、主に市民レベルの災害支援活動について知識を深めるワークショップを行いました。このプログラムでは、海外から来日する高校生たちは交流する日本人と共に、復興、エネルギー、持続可能な地域作りなどについて知ったり、学んだりします。私たちと共に学んだ5日の前後一ヶ月の間、彼らは東京に行って東日本大震災の一時避難者と会ったり、釜石市に行き東日本大震災の爪跡を自分たちの目で見たりしたそうです。私たちとのワークショップ初日、じつとりとした真夏日でした。事務所でまだかと待っていると、少し緊張した高校生たちと引率者のWさんが姿を現しました。私たちが出迎えると「コンニチハ」と言ってくださいました。高校生たちは皆非常に意識が高く、災害後のNGOの活動に、エネルギーや教育といったさまざまな側面から興味があると感じました。中でも、「長田の街歩き」とし、阪神淡路大震災の被害状況の甚大だった神戸市長田区を実際に歩き、復興の歴史をなぞってみようというワークショップでは、整備された街並みに「地震があったとは思えない」と口々に言っていました。ケミカルシューズの工場などが多かった長田区で、1995年1月17日に火の海と化した六間道商店街付近にさしかかったときには、以前とのあまりの相違に「何があったのか忘れちゃうかも」とこぼした生徒もいました。たしかに、人間がいかに視覚に頼っていっているのかという点を再考すると共に、阪神淡路大震災に居合わせた人たちの記憶や経験を、風化させずできるだけアウトプットをしていかなければならぬと身が引き締まった瞬間でもありました。2015年1月17日で20年を迎えるKOBEという土地にて20年という節目を超えたその向こうへの警笛を聞いたようにも思えました。

そのほか、このワークショップでは、被災地NGO協働センターの事業である「まけないぞう」を実際に作ったり、炊き出しをより身近に感じることのできるような昼食（おにぎりなど）を作りながら食べたり、さらに災害がいざ起こったときのワークショップをも行いました。まけないぞうを作ることで再び人生を歩もうとする作り手さんたちの、さまざまな気持ちを知りそしてその意味を考え、「自分の作ったこのぞうはずっと大切にする」と言ってくれた言葉が印象的でした。高校生たちと共に、私たちの活動や歩みを振り返ることで、客観的にKOBE、NGO、災害後の支援活動、さらには日本というこの国を見る機会になり、私たちが常に意識を高くもちそれに向かって突き進むことの重要性を考えた5日間でした。このワークショップを通して出会った高校生たちと将来再び出会い、お互いに高めあうような機会に恵まれることを期待したいと思います。

（多田茉莉絵）

# TOPICS ② – CODE に関する若者たち –

CODE は多くの若者の学ぶ場を提供しています。ボランティアとインターンシップという面から CODE の活動に携わっていただいた小坂さんと新居さんの感想をご紹介いたします。

## CODE でのボランティアを経験して

今年 10 月より、神戸市外国語大学の小坂さんにボランティアとして CODE の活動に参加していただいている。CODE の活動を経験した感想をご紹介いたします。

### 「CODE のボランティアに参加して」

私は、2014 年 10 月から CODE でボランティアをさせていただいている。具体的には、「食と国際協力」や「寺子屋」などのイベントに参加して知識を得つつ、週に 1 回事務所での作業をお手伝いしたり、ミーティングに参加したりしています。

今まで様々なボランティアをしてきましたが、今回のように NPO/NGO の事務所でボランティアをさせていただくことは初めてで、日々沢山のことを学ばせてもらっています。事務局長の吉椿さんを中心とするスタッフの方々から、CODE という団体がどう組織・運営されているか、災害救援の現場では何が必要とされているかをお話してもらったり、スタッフの方々が働いている姿を間近で目にしたりするなかで、災害ボランティアについて、そして NPO/NGO で働くということについて深く考えるようになりました。

災害復興に携わるうえで特に私が大切だと感じるようになったのは、被災者の方々とコミュニケーションをとることです。CODE でボランティアを始めてから、「ヒアリング」という言葉をよく聞くようになりました。現地の声をしっかりと聞くことで、求められていることと NPO/NGO の対応にずれが生じない効果的な支援ができるのだと学びました。これは、ボランティア活動を指揮する NPO/NGO の運営側だけに言えることではありません。ボランティア一人ひとりも、ただ現場に行って言われた作業をして終わり、ではなく、積極的に被災者の方々と関わる姿勢が必要なのではと思います。

このような学びを大切にしながら、感謝の気持ちを忘れず、これからも CODE で少しでもお役に立てるよう頑張ります。

(神戸市外国語大学 3 年 小坂めぐみ)

## インターンシップに参加して

2014 年 8 月 25 日から 29 日まで神戸学院大学の学生 2 名がインターンシップ生として CODE 海外災害援助市民センターを訪れました。インターンシップ生の新居さんの感想をご紹介いたします。

5 日間 CODE さんにてインターンシップをさせていただいたことは、私にとってとても貴重な経験となりました。まずインターンシップ初日に NGO とはなにか、CODE さんではどのような活動をされているのかを丁寧にスタッフの方が教えてくださいました。一から教えてもらったことで、ボランティアに対する理解がより深まりました。

インターンシップの中で、ボランティアに従事している他団体との交流を多くさせてもらうことができました。アイセックさんや、ワカモノヂカラさん、ユニークさんなどです。さまざまな団体と交流させてもらえたことによって、CODE さんのみならずボランティアを行っている方々の色々な角度からの考え方や行動を聞かせてもらうことができて、とても勉強になりました。このような機会を設けてくださった、CODE のみなさんにはとても感謝しております。インターンシップが実際に始まるまでは NGO がどのような仕事を行っているのかを想像することが難しかったため不安が大きかったのですが、スタッフのみなさんがとても親切にしてくださいました。お昼休みも一緒にご飯を食べさせてもらい色々なお話を聞かせてくださいり、とても楽しかったです。今回のみならず今後とも CODE さんが行っている活動に参加させてもらうなどして関係を継続していきたい所存です。

(神戸学院大学 3 年 新居亜沙美)



## イベント情報

# 2014年度「つながろう co-op アクション交流会」

阪神・淡路大震災から20年が経過する来年1月、コープこうべ主催のイベントが開催されます。阪神・淡路から20年、東日本大震災から3年が経過し、地域や暮らしにも大きな変化があり、いくつもの課題が生まれました。課題にどのように立ち向かっていくか、阪神・淡路大震災の経験から考えていきます。このイベントではCODEからの報告も行われます。

### 2014年度「つながろう co-op アクション交流会」

阪神・淡路大震災から20年、東日本大震災から4年～みんなでつくる これからの地域とくらし～

【日時】2015年1月16日(金) 13:15～17:20

【場所】神戸国際会議場

※開会前にはコープこうべ主催の「阪神・淡路大震災20年のつどい」閉会後は懇親会がいずれも同会場でございます。

【主催】コープこうべ・日本生協連

### ともにCODEを創りませんか

A4サイズの裏紙の寄付もお願い致します！

#### ■入会のお誘い

私たちと共にCODEの活動を担っていく会員を募集しています。

#### 【賛助会員】

個人・学生：年会費2,000円×1口以上

NPO/NGO：年会費2,000円×1口以上

企業・団体：年会費10,000円×1口以上

ほか、正会員、登録会員ご希望の場合は

事務所まで

#### ■ご寄付のお願い

CODEの活動を継続するために皆様からのご寄付を募っています。救援プロジェクトへのご寄付は15%を上限としてCODEの管理運営費に使わせて頂いております。ご協力お願い致します。

郵便振替 加入者名：CODE

口座番号：00930-0-330579

銀行振込 ゆうちょ銀行

支店名：○九九店(ゼロキュウキュウ)

支店番号：099 預金種類：当座

口座番号：0330579

加入者名：CODE

事務所での作業や翻訳ボランティア、自宅でも作業可能なボランティアなども募集中です。

会員・寄付者ご芳名(順不同・敬称略) 2014/7/1～12/3

個人・紅谷 昇平／キシノリコ／小牧 正子／吉川 榮子／いなだ 多恵子／井上 由紀子／塚本 謙三／旦保 立子／柚原 里香／大野 武子／大江 良一／鵜飼 卓／本岡 那智子／山崎 水紀夫／米田 玲子／伊藤 都／高島 弥寿子／石田 和子

正会員

個人・青田 良介

NGO/NPO・JIPPO

賛助会員

個人・松下 隆文／鈴木 有／紅谷 昇平／前畠 美智子／川中 大輔／南 裕子／田辺 エツ／北浦 和志／中村 大蔵／旦保 立子／阿久沢 悅子／杉浦 健／鈴木 嶺／黒田 達雄／山崎 水紀夫／橋本 成年／白井 宏明／平田 隆行／稻田 紀子／上田 耕蔵／島田 誠

## 役員・スタッフ活動記録 2014/7/1 ~ 2014/11/30

7月 3日	神戸学院大学現代社会学部で講義「災害とジェンダー」(斎藤容子さん)
7月 10日	神戸学院大学現代社会学部で講義「振り返り」(村井)
7月 12日	神戸学院大学 シンポジウムでパネラーとして参加 (吉椿)
7月 14日～	
18日	ワールドユースジャパン 北米高校生研修 (村井、吉椿、頬政、上野、多田)
7月 15日	第5回「食と国際協力」(日本と北米) (多田)
7月 17日	神戸学院大学現代社会学部で講義「まとめ」(村井)
7月 20日	アイセック「Question～国際協力について考える～」に参加 (上野)
7月 25日	CODE 寺子屋第1回 (室崎副代表)
7月 26日	学ガク会「セルビア×災害支援×日本語教師」で講演 (吉椿)
7月 29日	神戸大学 教養言論「阪神・淡路大震災」で講義 (吉椿)
7月 30日～	
8月 12日	四川省第24次派遣、青海省第5次派遣 (吉椿)
8月 5日	ソーシャルプロダクトに関する企業向け勉強会にてれーずんを紹介 (多田) KNC 提言専門委員会に参加 (村井)
8月 19日～	
20日	日本災害看護学会第16回年次大会で講演 (吉椿)
8月 19日	「世界人権デー記念イベント」に参加 (上野)
8月 21日	第6回「食と国際協力」(中国青海省) (吉椿) NGO・JICA 協議会コーディネーター会議に参加 (村井)
8月 22日	CODE 寺子屋第2回 (室崎副代表)
8月 23日	神戸大学年安全研修センターオープンゼミに参加 (吉椿)
8月 25日～	
29日	神戸学院大学インターンシップ
8月 28日	JICA フィリピン台風災害報告会に参加 (吉椿、上野)
8月 30日	六甲アイランド夏祭りにてれーずんを販売 (多田)
8月 31日	ワカモノヂカラ NPO 設立式に参加 (吉椿)
9月 3日	帝塚山学院大学 集中講義 (吉椿)
9月 4日	安全セミナー「災害と危機管理」(矢守克也、河田恵昭) に参加 (吉椿、上野)
9月 8日	NGO・JICA 協議会コーディネーター会議に参加 (村井)
9月 11日	CODE 理事会
9月 22日	舞子高校で講義 (吉椿)
9月 23日	シスター須藤講演・対談「ハイチからの祈り」(芹田代表理事)
9月 24日	第7回「食と国際協力」(ハイチ) (シスター須藤)
9月 26日	CODE 寺子屋第3回 (室崎副代表) 明石あかねが丘学園で講演 (吉椿) 第2回 NGO・JICA 協議会に参加 (村井理事)
10月 5日	アフガニスタン写真展とギャラリートーク 都市生活コミュニティに参加 (村井)
10月 8日	アイセック神戸大学委員会ヒアリング (吉椿)
10月 11日	CS フォーラム「流通するソーシャルプロダクト～フェアトレード商品を考える」にてアフガニスタンプロジェクトを紹介 (多田)
10月 15日	KNC 提言専門委員会に参加 (村井)
10月 16日	第8回「食と国際協力」(れーずんの会)
10月 21日	全日本佛教婦人連盟大会にてれーずん販売 (村井)
10月 27日～	
28日	小林聖心女子学院でのシスター須藤の講演サポート (吉椿)
10月 31日	CODE 寺子屋第4回 (室崎副代表)
11月 1日	荒田エコフェスタにてれーずん販売 (多田)
11月 2日	神戸学院大学シンポジウム「阪神・淡路大震災から未来へ」に参加 (村井、吉椿)
11月 4日	神戸大学国際協力研究科で講義 (多田、吉椿)
11月 7日	兵庫県広報課の取材 (吉椿)
11月 11日	中国ボランティア代表団研修 (吉椿)
11月 17日	アイセック神戸大学委員会送り出し事業局面接官を担当 (吉椿)
11月 20日	第9回「食と国際協力」(イラン)
11月 21日	MBS 取材 (村井、吉椿)
11月 25日	神戸学院大学「ボランティア論Ⅰ」で講義 (吉椿) 神戸女子大学にて CODE 活動紹介 (多田)
11月 29日	兵庫県立大学で講義 (吉椿)